

(研究ノート)

カンテ・ホンドと俳句 マラガでの講演の報告を中心に

福岡大学人文学部 青 木 文 夫
協力：ビセンテ・アヤ*

Resumen

En octubre pasado del 2018 fui invitado a Málaga (España) para dar una charla en la ceremonia del acto inaugural de la Semana Cultural de Japón y también para dar una ponencia sobre “el Haiku y el Flamenco” en la Universidad de Málaga. En este artículo quisiera escribir cómo me encontré con el mundo del Cante Hondo, aunque he sido un lingüista teórico, y cómo he realizado algún estudio sobre el tema del Cante Hondo y el Haiku.

2018年10月、筆者はスペイン・アンダルシア州有数の観光都市マラガでの日本文化週間¹の開幕記念式典と同週間の行事（於マラガ大学）に招聘され、「フラメンコと俳句」という演題で講演をしてきました。

スペインにおける俳句の研究者の名前は相当多くの方を挙げることができますが、日本でフラメンコの研究者と言えば、わずかの方のお名前を挙げるができるに過ぎません。フラメンコを趣味とする方、とくに踊りや演奏を極められた方はかなりいるかと思うのですが、フラメンコの詩の研究者ともなれば、ごく限られた方だけになるかと思ひますし、その意味で、それもフラメンコの研究の中にスペインでは非常に人気のある俳句との比較も含めていることが、彼の地の方々の興味を惹いたのではないかと思います。以下では、筆者のフラメンコとの出会いと、上記講演に至るまでの経緯を述べてみたいと思います。

1. Cante Hondo²との出会い

2002年から2003年にかけて、筆者はスペインセビジャ³に福岡大学在外研究員として、セビジャ大学で言語学の研究に専念する一方、指導教授のイスキエルド先生(Fernando Rodríguez Izquierdo)と宮沢賢治や大江健三郎の詩⁴の翻訳に携わったり、イスキエルド先生の俳句の翻訳理論などの授業にも参加していました。また渡西前からの友人で俳句の研究者もあるビセンテ(Vicente Haya Segovia、現セビジャ大学教授)との親交を深め、彼が提唱するスペイン語の情緒的動性(dinamismo emocional)と日本語の感情的静性(sosegado sentimiento)の立場から、スペイン語の動的表現に関する本を出そうという計画も提案され、その後、Aoki, Haya, Tsuji y Hernández(2004)の刊行、Aoki y Haya(2005、2006)などの論説の発表などで、理論言語学の研究と並行して、スペイン語、とくにアンダルシア地方のスペイン語の動的表現を多く含むフラメンコの詩であるカンテ・ホンドの世界に引き込まれていくことになりました。その後の基本的なテーマをカンテ・ホンドの詩の動的な特徴をどのように日本語に訳していくかという点を中心に据えて、上記ビセンテの協力も得て、共著で「フラメンコに生きる(Vivir Flamenco)」という草稿を完成させ、著書として刊行することを目論んでいましたが、日本では馴染みのないテーマ故に出版を引き受けてくれるところを見つけられずにいました。しかしながら、フラメンコに関する月間専門誌の「パセオ・フラメンコ」(株式会社パセオ)の関係者に草稿を読んでもらったところ、興味を示してくれて、単著としての出版は難しいけど、論考の中の興味深い部分を同誌に掲載してもよいとのお許

* Vicente Haya Catedrático del grado de los estudios asiático-orientales de la Universidad de Sevilla

¹ 日本文化週間の詳細は次の URL を参照して下さい。https://viviendojapon.es/

² カンテ・ホンド(cante hondo)の表記はhを発音するカンテ・ホンドと表記します。また cante jondo とも呼称されますが、この論ではjでの表記は用いないことを付言します。

³ セビリア(Sevilla)のことですが、セビジャと呼称します。

⁴ イスキエルド教授の指導のもとで博士論文を書いた現上智大学准教授エレナ・ガジェゴ(Elena Gallego)氏が当時の翻訳の一部を紹介してくれています。http://www.montsewatkins.net/vida_de_kenji.html

しを得ることができました。さらに、パロ (palo⁵) の解説にビセンテの知人でフラメンコの cantaora⁶ であるバルセロナ在住のコルパスさん⁶ の協力も得て2009年1月から12月までの1年間にわたり12回に凝縮して、紙面構成には編集者の谷口哲哉氏、イラストには小松このみさんの協力を得て、連載を終えることができました。この連載は、日本人の愛好家には踊りと演奏が主に注目されるフラメンコ芸術の歌 (カンテ) が、主にスペイン語で表現されているためその表現の意味を理解してもらえないところを、上手く日本語に訳せば、そこには思いもよらない強烈な世界があるということを伝えることができるかもしれないと思い、現在の研究に至っています。

同誌に掲載された第1回のレイアウトを次の頁に掲載しました。参考にご覧下さい。

2. カンテ・ホンドの研究領域

2.1 マラガでの講演に向けて

セビジャを訪れたことから、突然それまでの理論言語学とはかけ離れたカンテ・ホンドの世界に引き込まれた筆者ですが、筆者はフラメンコ芸術を鑑賞するのは大好きで、お気に入りの cantaor⁷、cantaora⁸ に演奏家も一杯いますが、筆者本人は踊りも演奏もできません。惹かれたのは、カンテ・ホンドの詩によって表現される世界と、それをいかに日本人の愛好家に伝えるために日本語訳を工夫するのかということです。その背景にはスペイン語と日本語の言語的・文化的差異があるのは当然ですが、それが深部ではどう分析されるのかということを考えてときに、ビセンテが研究している俳句の心の世界をいかにスペイン語へ翻訳するのかということの裏返しであるということが気が付いてきました。というわけで、マラガでの講演の背景にフラメンコと俳句の世界の比較という、「パセオ・フラメンコ」の連載を終えたあと温めてきたテーマがあったのです。しかし、その分析は感情的・観念的な部分の他に、試論ではあります

が、本来の研究領域の理論言語学的記述も模索することになっています。この間のことをもう少し説明すると、筆者はビセンテの推薦により、2014年春にセビジャ大学の国際センターから招聘され、「日本語の楽しさ」⁷ という演題で日本語学科の学生・教員を中心とした聴衆相手に1時間ほどスペイン語で講演をしました⁸。その後ビセンテも交え、学生たちとも話しをしました⁹が、日本の色々なことが彼らを惹きつけるのと同時に、日本語で表現される世界も彼らを惹きつける大きな要因になっていることに気が付きました。この点については、詳しく後述しますが、言語間の差異の大きさが逆にその言語の学習意欲を引き出すことがわかったのです。というわけで、この度のマラガでの講演は「フラメンコと俳句」という30年前に理論言語学者を目指していた筆者からは思いも付かないテーマとなりました。実は、今回も推薦してくれたのはビセンテで、彼も日本文化週間の講演者の一人でしたが、主催者側から「誰か日本人の研究者で日本文化週間に相応しい講演者を紹介して欲しい」との要望に対し筆者を推薦してくれました。ただし、講演内容は理論言語学に関してではなく、ビセンテが日本文化である俳句について講演するのに対し、日本人としてスペイン文化にどう取り組んでいるかについて話して欲しいとのことで、かねてから温めてきた「フラメンコと俳句」について講演することで、2018年9月末より10日間ほどマラガに行くことになりました。筆者に依頼された仕事は日本文化週間初日10月1日に開催された開幕式 (マラガ市役所) での簡単な講演 (10分程度) と10月4日にマラガ大学での1時間程度の講演でしたが、市役所での講演はフラメンコのバイレ¹⁰が目の前で演じられているという状況で、論旨もよく伝わらなかったと思いますが、マラガ大学での講演はフラメンコの実演とははっきり切り離されて、講演前にはまさかのテレビ局の取材を受け¹¹、60分間約70名の聴衆の前でフラメンコと俳句に関する試論を展開できたと思います。

さて、以下ではその講演の要点を述べ、その後筆者なりにどのように研究を展開しているかについて述べたいと思います。

⁵ フラメンコの曲種・曲調に対する名前。ファンダンゴとかソレアなど無数にあります。この論では、この点には踏み込まないことにします。

⁶ Maria del Carmen Corpas Martín、当時バルセロナに在住していた方でフラメンコの cantaora (歌手) をされていました。

⁷ 講演と質疑応答はスペイン語で行いました。スペイン語での題は “Pensar en japonés y divertirse en japonés” でした。

⁸ この講演がきっかけとなり、セビジャ大学と福岡大学は大学間の協定締結し、2018年夏にセビジャ大学から、また2019年の夏からは福岡大学からの学生の派遣が始まっています。

⁹ 同様のことは朝鮮語についても言えると思います。昨秋のマラガ大学では朝鮮語を学習している学生にも同じことが当てはまると感じました。

¹⁰ baile、フラメンコの踊りのこと。演奏を toque、歌をカンテ (cante) と呼称します。

¹¹ アンダルシアのテレビ局である canal sur に講演前にインタビューを受け、講演の様子が録画されていて、後日日本文化週間の総集編が放映された際に、その中に僕も映るという思い出に残ることになりました。その総集編のアーカイブが残っています。期間不明ですが、次の URL の映像の13分過ぎから (前半はある作家のインタビュー) 日本文化週間の総集編で、その中に筆者のインタビュー他も映っています。僕の講演の聴衆の前列右端で楽しそうに笑っているのは元東大教授でその後コンプルテンセ大学教授も務めたカルロス・ルビオ先生 (Carlos Rubio) です。

<http://www.canalsur.es/multimedia.html?id=1370106&jwsourc=cl>

VIVIR FLAMENCO

カンテ・ホンドの世界

文／青木文夫、ビセンテ・アヤ
 texto por Fumio Aoki y Vicente Haya
 曲種解説／マリア・デル・カルメン・コルバス・マルティン
 comentario de palos por María del Carmen Corpas Martín
 イラスト／久松このみ
 ilustración por Konomi Hisamatsu

第1回 激情はフラメンコの感情

「激情 (furia pasional)」のレトラ

Si mi mare no me casa
 para este domingo que viene
 le pego fuego a la casa
 con toíto lo que tiene
 ※mare = madre, toíto = todo

次の日曜日までに
 母が私に結婚させてくれないなら
 何もかもいっしょに
 この家に火を放つ

作詞：不明
 カンタオール：アントニオ・マイレーナ
 曲種：タンゴまたはガロティン
 参考音源：フラメンコ・サイト「flamenco y universidad」(http://flun.cica.es/flamenco_y_universidad/) より「Grabaciones (録音)」の項目から試聴可



フラメンコの詩は総称してカンテ (cante) と呼ばれるが、カンテ・ホンド (cante hondo) 〈註①〉は力強い感情の情感を込めて歌われるカンテのことである。アンダルシアの詩人マヌエル・マチャードが、「カンターレス、我が祖国のカンターレス、カンターレスはアンダルシアだけのもの (Cantares 〈註②〉), Cantares de la patria mía... Cantares son sólo los de Andalucía) 」と詠っているように、深い感銘を与えてくれるほとんどの詩は、アンダルシアの民衆の心そのものと言っても過言ではないであろう。

フラメンコを知ることは、アンダルシアの民衆の心に触れること。とくにフラメンコの詩を知ることは、アンダルシア地方のスペイン語 〈註③〉を理解するとともに、ジプシーたちの心の叫びを体感することである。今回から毎月、カンテ・ホンドの広大な精神世界の一部を、そのテーマに沿って眺めてみたい。

フラメンコの詩には「静まることのない動性」 〈註④〉がある。これは挑発的で主観的で無遠慮な言語を用いるアンダルシアの民衆の特徴であり、論理よりも画像的イメージを追究する視覚的な性格

であることに由来する。

カンテ・ホンドが具象化する典型的な例は、嫉妬、復讐、自尊、死、愛、脅迫、不信、罵倒、不誠実、呪術、誇張、不服従、快楽、放蕩、怠惰など。まさに「情熱 (心の激しさ: pasión)」の世界である。

これらの感情や情態が、敏捷で、針で刺すように鋭く、瞬時に捕まえることができる動的なアンダルシアの言語によって表現される。

ちなみに「情熱」は、カンテ・ホンドにはところかまわず出現する、欠かせない感情である。それはカンテ・ホンドが、アンダルシアが経験したイスラム文化の流入に深く根ざしていることを示している。というのは、情熱的であることが不純で罪深いことであるキリスト教世界とは異なり、イスラム教世界では「情熱」が至極当たり前のこととして受け入れられるからである。そして、その「情熱」は喜びであり、魔術であり、度を越せば超すほど、カンテ・ホンドの深淵な世界は広がるのである。

その心の激しさを表すカンテの代表作として、アントニオ・マイレーナがラ・ニーニャ・デ・ロス・ペイネスに捧げて歌ったカンテを紹介してみよう。

結婚相手は両親が決めるというジプシーの掟に逆らって、愛する人との結婚を望む娘が、もし叶わぬなら家に火を放つという誓いを密かにたてる。「何もかもいっしょに (con toíto lo que tiene)」という表現が、すべてが焼き尽くされ、誰一人救われないという壮絶な決意に至ったことを表している。愛する人との結婚か、「すべてを燃やしてしまう」という極端な選択しかない激情が、その愛のすさまじさを示す。

これは、カマロンが歌うブレリアの名曲「Pasando el puente」の1節「yo siempre estaré a tu lado (=lado) y no me iré de tu vera (ずっとお前のそばにいて、お前を捨てたりなんてしないさ)」という男の誓いがあってこそ、この娘の壮絶な誓いが生まれるのである。

①「カンテ・ホンド」は Cante Hondo (標準的なスペイン語では「カンテ・オンド」とhを発音しない)、またはフェデリコ・ガルシア・ロルカの作品に由来して Cante Jondo と書かれるが、アンダルシアでの実際の発音は「カンテ・ホンド」である
 ②フラメンコの歌も含めた、さまざまな形式の民衆の心の歌カンタール (cantar) の複数形
 ③アンダルシア語と、多くのジプシー語 (caló または romani) の語彙が特徴的なスペイン語
 ④スペイン語で desasossegado dinamismo

2.2 マラガでの講演までの研究成果と講演の要旨

筆者の学生時代、新入生への授業に先立ってスペイン語のポピュラーな唄の歌詞を集めた冊子が配られたことがあります。後になってから恩師である故ロボ神父様 (padre Félix Lobo) や故ディエス神父様 (padre Manuel Díez) の得意の持ち歌が一杯おさめられていることもわかったのですが、スペイン語を学びながら、その本のいくつかの歌曲も覚えるのと同時に、その冊子の冒頭に載っていたセビジャ生まれの詩人マヌエル・マチャード (Manuel Machado) のカンターレス (*Cantares: cantar* の複数形) という題名の詩の一節「苦悩を歌えば、苦悩を忘れる (*cantando la pena, la pena se olvida*)」に心を惹かれたのでした。スペイン文学の素人であった当時は、カンターレスといえば、バルセロナ生まれの歌手ジョアン・マヌエル・セラート (Joan Manuel Serrat) の *GOLPE A GOLPE, VERSO A VERSO* のフレーズが有名な大ヒット曲のことくらいにしか思っていませんでしたが、後になってこれがマヌエル・マチャードの弟のアントニオ・マチャード (Antonio Machado) の詩であることがわかり、同じタイトルの兄の詩から感銘を受け、フラメンコの世界に引き込まれることになることは夢にもありませんでした。フラメンコの歌が総称してカンテと呼ばれるのに対し、以下の論のテーマであるカンテ・ホンドは短詩の形式で詠われるフラメンコのカンテのことで、カンテはフラメンコの歌も含めたさまざまな形式の民衆の心の歌のことです。もちろん、カンテはスペインの民衆の歌ですが、マヌエル・マチャードが上で述べたカンターレスの詩の中で、「カンターレス、我が祖国のカンターレス、カンターレスはアンダルシアだけのもの」 (*Cantares, Cantares de la patria mía... Cantares son sólo los de Andalucía*) と詠っているように、深い感銘を与えてくれる殆どの詩がアンダルシアの民衆の中から出てきたと言っても過言ではないでしょう。フラメンコというと、激しいギターと切ない歌声を背に踊る情熱的なジプシーの姿を思い浮かべる人が多いでしょう。もちろん、それもフラメンコの一つの情景ですが、その根底には、アンダルシアの魂に深く根ざしたジプシーたちの詩と、その詩を歌うための音楽形式があります。それは、アルーアンダルス¹²の時代に、ジプシーたちがスペイン南部のこの地に住みつき、そこでの彼らの暮らしの中から出てきた民衆の心の詩に、彼らを取り巻く時代の流れの中で情感のこもった表現形式が与えられ、結実したものなのです。ただし、フラメンコがジプシーの文化であると言うとき、そこにはヨーロッパでスペインだけが経験したイスラム文化があり、それがジプ

シー文化の背景となって、フラメンコの詩と音楽形式に大きな影響を及ぼしてきたことも忘れてはなりません。アンダルシアという特異な土壌が、スペインとイスラムとジプシーの3つの伝統を融合させて、フラメンコと呼ばれる民衆芸術様式を生み出したと言うべきでしょう。

フラメンコを知ることは、アンダルシア地方のスペイン人の心に触れること。とくにフラメンコの詩を知ることはアンダルシア地方のスペイン語の心に触れること。その目的は、上述した「パセオ・フラメンコ」誌への連載で、ごく一部ですが、ジプシーたちの心の叫びを描くフラメンコの詩に表現された精神世界の扉を開くことができたと思います。

まずは、マラガの講演に至るまでに筆者がビセンテの大きな協力の下得られたフラメンコのカンテ・ホンドの広大な精神世界を眺めてみたいと思います。

アンダルシアのフラメンコの詩には「静まることのない動性」があることはすでに述べました。それは挑発的で主観的で無遠慮な言語を用いるアンダルシアの民衆によって表現された詩の特徴であり、アンダルシアのスペイン語の表現自体が動的で、論理よりも画像的イメージを追究する視覚的なものであることに由来します¹³。そのダイナミック (動的) な言語によって表現されるフラメンコの詩のカンテ・ホンドが具象化する伝統的なアンダルシアの精神世界は、嫉妬、復讐、自尊、死、愛、脅迫、不信、罵倒、不誠実、呪術、誇張、不服従、快楽、放蕩、怠惰といったことで表現されるもので、まさに「情熱 (心の激しさ: *pasión*)」の世界です。これらは全て、敏捷で、針で刺すように鋭く、瞬時に捕まえることができないダイナミックな言語表現によってもたらされます。誰でも知っているアンダルシアの神話的存在であるカルメン (Carmen) とドン・ファン (Don Juan) を有名にした「情熱」は、カンテ・ホンドにはとほころかまわず出現するのですが、そのことはカンテ・ホンドが伝統的なイスラム文化に深く根ざしていることを示しています。というのは、情熱的であることが不純で罪深いことであるキリスト教世界とは異なり、イスラム教世界では「情熱」が至極当たり前のこととして受け入れられるからで、その「情熱」は喜びであり、魔術であり、いかに度を超しているかによって高められるのです。

以下では、カンテ・ホンドによって表現される典型的なフラメンコの心と道徳的な世界を、思いつくままに述べてみることにします。瀆神 (*blasfemia*)、牢獄 (*cárcel*)、呪い (*maldición*)、誓い (*juramento*)、独占的で男尊女卑的な愛 (*amor posesivo y machista*)、見捨てること (*abandono*)、性的不誠実・不倫 (*infidelidad sexual*)、

¹² Al-Andaluz: イスラム支配下のアンダルシア地方のアラビア語による呼び名。アンダルシアという名称の起源。

¹³ スペイン語の視覚的な表現ということに関しては、参考文献に挙げた Aoki, F., Haya, V., Tsuji, H. y Hernández Arribas, M. J. *Expresiones visuales del castellano usado en Andalucía*, (邦題:『スペイン人はこう話す! -気持ちを伝える視覚表現150-』芸林書房) を参照して下さい。

偶像崇拜 (*idolatría*)、女を巡る争い (*rivalidad masculina*)、報復・復讐 (*venganza*)、頑強さ (*firmeza*)、犯罪・冤罪の尋問 (*interrogatorio criminal*)、自然における生命・生活 (*vida en la Naturaleza*)、独立 (*independencia*)、逞しさ (*reciedumbre*)、大地の子 (*hijo de la tierra*)、物質主義 (*materialismo*)、死 (*muerte*)、沈黙 (*silencio*)、後悔 (*arrepentimiento*)、神とセックス (*Dios y el sexo*)、健全なセックス (*sexualidad sana*)、愛の夜 (*noche de amor*)、激情 (*furia pasional*)、男尊女卑 (*machismo*)、性の虜 (*enconñamiento*)、永遠の愛 (*amor eterno*)、娼婦 (*puta*)、苦痛 (*duelo*)、辱しめ (*deshonra de la mujer*)、妻と愛人 (*la mujer y la amante*)、束の間の愛 (*amor pasa-*

jero)、嫌悪 (*aborrecimiento*)、裏切り (*traición*)、喧嘩 (*pelea*)、自由 (*libertad*)、その日暮らし (*vivir al día*)、ワイン (*vino*)、馬鹿騒ぎ (*juerga*) などですが、もちろん、これら以外のテーマも考えられるし、これらのテーマも完全に独立したものではないので、それぞれのテーマに折り重なっている場合があることは明らかです。以下では、カンテ・ホンドにおいて際立って強烈に描かれているテーマを読んでいただきたく、これらのテーマの中からいくつかを選んで紹介したいと思います。

筆者のカンテ・ホンドとの最初の出会いは次の詩でした。

Por Dios que la respetara
llorando me lo pedía
por Dios que la respetara
yo viendo que me quería
yo de su cuerpo abusaba
ella callaba y sufría

(訳)

後生だから大切に
泣きながらそう俺にすがったんだ
俺を好きだって分かっていたから
体を弄んでやったのさ
あいつは黙って耐えていたんだぜ

Autor: Camarón (presumido)
Cantaor: Camarón de la Isla
Guitarra: Paco de Lucía

天才カマロン (Camarón de la Isla) の歌うこの切ない詩、フラメンコ独特のスペイン語の発音のおかげで、正確に聞き取れない部分もあったが、思わずこんなこと言っているのかと耳を疑ってしまいました。この詩の後に配された “*Y le indignó aquel beso que le di, y aquel beso le indignó, a los tres o cuatro días otro beso me pidió. ¡Ay! Algo el primero tendría. La hice pecar, y pecó, yo era malo y ella buena, la hice pecar, y pecó, ella se murió de pena, del remordimiento yo, de lo que hice con ella.*” 「(訳) おれがしてやった口づけがあいつを傷つけたけ

ど、3、4日経ったらまたせがんできたんだぜ。最初の口づけに何かあったんだろう。俺が彼女の道を誤らせたのさ。俺が悪いし、あいつは何も悪くない。俺のせいで罪を犯したんだ。あいつは悲しみにくれて、おれは良心の呵責に。おれがあいつにしたことにさ。」には、呆れると言うよりは、華やかなフラメンコの世界に潜む闇に触れた感じで、その後カンテ・ホンドの世界に深く引き込まれていくのでした。しかしながら、様々なカンテ・ホンドに触れるにつれ、そこには闇の世界だけではなく、ジプシーたちが日常感じている様々なテーマが存在

し、そのどれにも素晴らしい詩が配されていることが分かり、さらにスペインだけが経験したイスラム支配がジプシーたちに大きな影響を及ぼしていることが分かり、ますますカンテ・ホンドの世界にのめり込んでいくのでした。そういった様々なテーマの主なものを上で羅列し

たのですが、その中で今筆者が研究している俳句との対照で際立つテーマについて述べてみたいと思います。

次のカンテ・ホンドを見ましょう。

Me gusta vivir en el monte (er = el)
donde la voz corre y vuela
y donde duermo tranquilo
a la luz de las estrellas

autor: José Pérez Guzmán
cantaor: El Cabrero
palo: tiento

このカンテ・ホンドに表現されているテーマである、「自然における生命・生活」の表現に対して筆者は次の訳を配しました。

山で暮らすのが好きだ
声が走ったり飛んだり
星明りの下で静かに眠れる

フラメンコの詩人が歌う自己と自然との関係は、俳句に描かれる世界と同じように、深い愛情がこもったこのうえなく美しい表現に満ちています。そこにはフラメンコの詩人たちの理想——あらゆる日常の煩わしさから解放された、自然の中での生活と恋愛が描かれています。

エル・カブレロは、そんなカンテを歌わせたら右に出る者がいないカンタオールの人です。このカンテ・ホンドは、声に「correr (走る)」や「volar (飛ぶ)」といった表現が用いられていることで広大な自然の美しさとそれを独り占めして生活する楽しさを強く感じさせて

くれます。ジプシーたちは自然の中で生活すること余儀なくされてきました。しかし、彼らは自然と共生し、過酷な暮らしを愛するようになり、このカンテは、彼らがどのようにして、その境地に至ったのかを見事に教えてくれています。故に「声が走る」や「声が飛ぶ」と言う訳は日本語としては少し奇異な表現かもしれませんが、そのまま直訳を配することで、原文の表現の美しさと動的な意味を失わないようにしてみました。この自然における動的な表現を、つい俳句の中の静的な自然の表現と比較したくなります。種田山頭火は次のように詠んでいます。

ぬれてついてほんにしづかな雨
Completamente empapado
Una lluvia verdaderamente mansa
(西訳はビセンテ・アヤによる)

それとは対照的に、怒り、喧嘩、嫉妬、不倫といった

人間や人間関係の醜悪さを描くカンテ・ホンドには思わ

ず眉を顰める表現が現れます。

Si mi mare no me casa
para este domingo que viene
le pego fuego a la casa
con toíto lo que tiene
(mare= madre, toíto = todo)

（訳）

次の日曜日までに
母が私に結婚させてくれないなら
何もかもいっしょに
この家に火を放つ

作詞（autor）：不明

カンタオール（cantaor）：アントニオ・マイレーナ（Antonio Mairena）

曲種（palo）：タンゴ（tango）またはガロティン（gorrotín）

娘の結婚は両親が決める社会。その中で、愛する人との結婚を許してもらうべく、娘は自分の家に火を放つという誓いを密かにたてています。「何もかもいっしょに」という表現が、その火から何も、そして誰も救わないという決意が鋭く感じられ、激しい動揺を経てその誓いに至ったのを示しています。結婚が全てを燃やしてしまう

か。その激しさが本当の愛を表わしています。

とりあげたカンテ・ホンドと俳句は断片的ですが、カンテ・ホンドの表現の動性と俳句の表現の静性は際立っていると思います。

俳句とカンテ・ホンドにおける「死」のテーマについて見てみたいと思います。

白梅に
明くる夜ばかりに
なりにけり

燕村

この俳句のスペイン語訳はいくつかあるけれども、web上に公開されている次の訳を見ましょう。

En la flor blanca
del ciruelo amanece
suavemente
(José Bermejo, la página web de El Rincón del Haiku¹⁴)

この俳句に対し、次のカンテ・ホンドを比べてみましょう。

¿Qué quieres que tenga?
las entrañas de mi cuerpo
se las va a comer la tierra

palo: tango o bulería

(Rodríguez Marín の収集から引用、作者不詳)

Rodríguez Marín¹⁵は上記と似た表現を含むカンテ・ホンドを多く収集しています。いくつかを挙げると、“¿Qué quieres que tenga? Que me han dicho que a tu cuerpo se lo va a llevar la tierra.” “Qué lástima de carita que se la coma la tierra.”など枚挙にいとまがありません。カンテ・ホンドのテーマは明らかに敗者に対する「死」であるのに対し、俳句のほうは原文であれ、スペイン語訳であれ、「死」がテーマであることを汲み取るのは非常に

難しいと思います。筆者も注釈¹⁶がなければそれを理解することはできません。この俳句とカンテ・ホンドをマラガの講演で披露した際に、元東大教授でしたカルロス・ルビオ先生（注11参照）が痛く感心して、この俳句とカンテ・ホンドの対照をその後の彼の講演で取り上げていただいたとのことでした。

死のテーマの静的な俳句のほんのいくつかを挙げます。

露の世は露の世ながらさりながら

小林一茶

春夕べかくれんぼうの鬼は母

須田桜児

こういった俳句のスペイン語への訳出は非常に難しいものと考えられます。一茶の句については web 上で見

かけた次の訳がありますが¹⁷、果たしてその意味は伝わっているのかどうかと考えさせられます。

Este mundo es sólo rocío,
sólo rocío...
aún así... aún así...

¹⁴ 次の頁から参照しました。

<http://www.elrincondelhaiku.org/int22.php?autor=34&serie=0&haiku=407>

¹⁵ Francisco Rodríguez Marín のどの著作から引用したかについては不明で、明確に記述できないことをお詫びします。というのは膨大な著作からセビジャ大学などでコピーした収集やメモした中から引用しているため、原典が不明なのが実状です。申し訳ありません。

¹⁶ 作者、与謝蕪村の辞世ともされている作品です。その注釈は「床に臥せり、朝日が白梅の間から漏れてくる夜明けを迎えるだけの日々になったなあ。」ということです。

¹⁷ Círculo de poesía という頁への Gutiérrez Cervantes 氏の投稿から引用しました。

<https://circulodepoesia.com/2013/12/issa-el-haiku-y-la-tristeza-de-las-cosas/>

もちろん、「死」の表現を直接的に句に含める俳句も多くありますが、ビセンテが指摘（comunicación personal¹⁸）しているように、カンテ・ホンドが自分（yo）

に言及するのに対し、俳句には自己が表現されず、受容と調和が強調されます。例えば、種田山頭火の次の句が象徴的です。

死んでしまへば雑草雨ふる

さて、上述した激情や死のテーマの動性以外のテーマも見てみたいと思います。

Al amanecer
al amanecer
con un beso blanco
yo te desperté

autor: Manuel Molina
cantaora: Lole Montoya
palo: bulería

（訳）
夜明けに
朝を迎えるこのときに
喜びの後の口づけで
お前を目覚めさせた

自然、激情と来れば、「愛の夜」というテーマが浮かび上がります。ローレ・モントーヤが情感を込めて歌うこの曲には、貧しいけど清貧に生きるジプシーの姿が映

されています。この詩の前提にはカマロンが歌う次の有名なブレリアが配されると思います。

porque me viene de herencia
de unos gitanos honraos
y de familia canastera
y yo siempre estaré a tu lao
y no me iré de tu vera

¹⁸ *En la copla flamenca, la reacción es de rebeldía y enfado. En caso del haiku, hay aceptación y armonía.*とビセンテは述べています。

(訳)

俺が受け継いだのは、
高潔なジプシーの血と、
籠作りの家系さ
ずっとお前のそばにいて、
お前を捨てたりなんてしないさ

そして、二人だけの漆黒の「愛の夜」が終わりを迎えたとき、上記の愛の夜が新たな一日を迎えるのです。

Cuando al fin tu boca se separó de la mía
la noche, dos veces negra,
se vistió de luz del día

(訳)

君の唇が僕の唇から離れたとき、
真っ暗な夜が朝の光を帯びていた

3. 結び

筆者は、言語学とスペイン語を主専攻にするものとして、言語間に存在する特徴を理論的に説明しようとする一方、言語文化論や社会言語学的に、それぞれの言語の特徴がどのようにその言語使用者の共同体の文化的な影響を及ぼしているかにも注目してきました。もちろん、

その分野には多くの専門家がいて、ここで迂闊なことを述べれば、お叱りを受けるかもしれませんが、俳句とカンテ・ホンドの対照がスペイン語と日本語の特徴を大きく映し出していると感じています。日本語もスペイン語もいわゆるプロ脱落言語ですが、日本語には動詞の活用もなく、さらに目的語の脱落も許します。

例えば、小林一茶に次の句があります。

蝸牛
そろそろ登れ
富士の山

この俳句のスペイン語訳をいくつか検索すると、次のようなものに多く出くわします。

Al Fuji subes
despacio – pero subes
caracolito
(una traducción tomada de la
página web de César Sánchez¹⁹)

俳句ではスペイン語の *yo* に言及しないという考えが支配的なため、この俳句のスペイン語訳では一般に「登る」のが蝸牛として扱われるが、多くの解釈で見受けられるように、「ゆっくり登る蝸牛のように、自分もゆっくりと物事に対処していかなければならない」という含意があるというのが定説のようです。しかしながら、スペイン語訳からそのような含意が汲み取れるのか不明です。スペイン人の俳句研究家は、俳句の特徴として、*yo* に言及しないという特徴が分かっているのです。実際には自分（作家）のことを言っているという可能性を思い浮かべますが、一般の方に上記のスペイン語訳からそのよ

うな情景が浮かぶかと言えば、疑問かもしれません。それは、一つには日本語がプロ脱落言語であり、さらにスペイン語とは異なり動詞の活用もないということに起因しているのではないかという点をもっと組織立てて、研究しようと思っているところです。

さらに、もう1点、これは過日のパセオ誌でも述べたのですが、イスラム思想のジブシーへの影響を、イスラムの神である Alá（アンダルシアでは Dibé、Debé、Debel などと呼ばれる）とキリスト教の Dios の使い分けや、イスラム思想の定命（al-qadar、または qadar）の影響について、研究を深めていきたいと思っています。

¹⁹ 次の頁から引用しました。https://www.tallerdeescritores.com/haikus-de-Cesar-Sanchez

資料

文中で述べた各テーマの代表的なカンテ・ホンドを紹介します

Cantares

(Manuel Machado)

Vino, sentimiento, guitarra y poesía,
hacen los cantares de la patria mía...

Cantares...

Quien dice cantares, dice Andalucía.
A la sombra fresca de la vieja parra,
un mozo moreno rasguea la guitarra...

Cantares...

Algo que acaricia y algo que desgarra.
La prima que canta y el bordón que llora...
Y el tiempo callado se va hora tras hora.

Cantares...

Son dejos fatales de la raza mora.
No importa la vida, que ya está perdida.
Y, después de todo, ¿qué es eso, la vida?...

Cantares...

Cantando la pena, la pena se olvida.
Madre, pena, suerte; pena, madre, muerte;
ojos negros, negros, y negra la suerte.

Cantares...

En ellos, el alma del alma se vierte.
Cantares. Cantares de la patria mía...
Cantares son sólo los de Andalucía.

Cantares...

No tiene más notas la guitarra mía.

以下各テーマを代表する詩の原文と試訳
最初のカッコ内はそれが歌われるときのフラメンコのパロ

冒瀆・瀆神

(Soleá (de la Andonda))

Yo te quiero más que a Dios...

¡Jesús! ¡Qué palabra he dicho!

Meresco la Inquisición

(meresco = merezco)

お前を神よりも愛しているなんて
ああ、なんてことを言ってしまったんだ
俺は異端審問に値する

(Soleá)

No me fio ni de Dios

Por fiarme de mi primo

mira lo que me pasó

神なんかこれっぽっちも信じていないのに
いとこのことをつい信じてしまって
俺がどうなったか見てみな

牢獄

(Carcelera)

En la cárcel estoy preso

porque di una puñalá,

que la hembra que tenía

me la querían quitá

(puñalá = puñalada, quitá = quitar)

牢獄に囚われている
人を刺したからさ

俺の女を
引き離そうとした奴がいたからだ

(Carcelera)
Maldita sea la cárcel
sepultura de hombres vivos
donde se amansan los guapos
y se pierden los amigos

牢獄なんてこんちくしょうだ
生きた人間が入る墓場
美男子はおとなしくなり
友達はいなくなる

呪い

(Toná)
Se te vean tus carnes
desprendías de tu cuerpo,
si tú vienes a dejarme
(desprendías = desprendidas)

ここに來たのが私を見捨てるためなら
体から引きちぎられた
あなたの肉片を皆が見ることに

誓い

(Soleá (fragmento final))
Dices que no me pués vé
Desa palabra tacuerdas
Por la leche que mamé

(pués = puedes, vé = ver, desa = de esa, tacuerdas = te acuerdas)

俺に会えないと言うのかい
俺が飲んでた乳に誓って
お前にその言葉を忘れさせない

独占的で男尊女卑的な愛

(Soleá de Triana)

Te den un tiro y te maten
como sepa que diviertes
a otro gaché con tu cante
(gaché = gachó)

お前が他の男を自分の歌で
楽しませているなんてわかったら
銃で打たれ殺されることになるんだぞ

見捨てること

(Siguriya de Zurraque)

Mar doló te mande Dios
como con otro te vaya
que tas llevaíto mío
sangre mía en tus entrañasⁱ
(mar = mal, doló = dolor, tas llevaíto = te has llevado)

他の男とどこかに行ってしまったら
神がお前にひどい苦しみを与えるだろう

ⁱ 言語的な観点からすると、動詞表現の *llevaíto* が興味深い。縮小辞形成を動詞に当てはめるのは、Real Academia に従えば正しくないであろうが、カンテ・ホンドにおいては表現の中に感情を込める意味でもよく用いられる。さらに、*te has llevado mío* という表現（実際は *te has llevado de mí*）にスポットライトを当ててるのも興味深いことであろう。

だってお前の心と体の奥底には
俺から奪った血が流れているんだ
(だから俺は死んでしまう)

(別の解釈)

他の男とどこかに行ってしまったら
神がお前にひどい痛みを与えるだろう
だってお前のお腹の中には
俺の血を持ったものが宿っているんだ

性的不誠実・不倫

(Romera)

Ya te lo he dicho, Romera,
que no me cantes cantares
que si te llego a piyá
ni er santolio te vale
(piyá = pillar, er santolio = el Santo Óleo)

ロメラ、もうお前に言ったはずだ
歌うのもいい加減にしろ
もしその場に踏み込んだら
お前は終油の秘蹟さえ受けられないんだ

偶像崇拜

(Soleá de Alcalá)

Deja la luna quieta
que no se mete con nadie
lo mismo que sus planetas

お月様を静かにしておいてね

誰にも口をださないから
その惑星たちも同じようにね

(Siguriya)
A la luna le pido
la del alto Cielo
cómo le pido que saque a mi padre
de donde está preso

月に
天空にまします月に
父が囚われているところから
外に出してくれることを
どんなにか願う

女を巡る争い・恋敵

(Soleá)
Si otro te camelara,
yo sacaría un cuchillito
y la cabeza le cortara

もし他の男がお前を口説こうものなら
ナイフをだして
そいつの頭を切りつけてやるからな

(不明)
Al que me estorba quererte
en tu calle mataré...

お前との恋路を邪魔するやつは
お前の家の前で殺してやる

復讐

(Tiento)

Anda compañera,
permitan los sielos
que con el cuchiyó que matarme quieres
mueras tú primeroⁱⁱ
(sielos = cielos, cuchiyó = cuchillo)

まさかお前が...
天よ許したまえ
俺を殺そうとしたこのナイフで
お前が先に死ぬんだ

(Tiento)

Si no me vengo en vía
me vengaré en muerte
como andaré toas las seporturas
jasta que te encuentre
(vía = vida, seporturas = sepulturas, jasta = hasta)

生きているうちに復讐できないなら
お前が死んでからでも復讐してやる
墓という墓を歩き回って
お前を見つけるまで

(不明)

A un Dibé le estoy pidiendo
que como me matas mueras...

ⁱⁱ 言語学的観点からは、女を殺すことを許してくれるのが不特定な神であることを示す複数形の (cielos) というのが興味を引く表現である。

神様お願い
お前が私を殺すように、お前にも死を

頑強さ・屈強さ

(Bulería por soleá)
Mi cuerpo es como er navío
cuando lo están carenando:
mientras más golpes le dan,
más firme se va queandoⁱⁱⁱ
(er = el, queando = quedando)

わたしの体は船のようだ
修理して
強く叩かれれば叩かれるほどに
より屈強になっていく

犯罪・冤罪の審尋

(Tiento)
Grande castigo a mi cuerpo
todos los días le dan,
para que diga cositas
que mi boca no dirá

ほんのちょっとしたことを言わせるために
毎日、毎日俺の体に
大きな苦痛を与えるけど
俺の口は絶対に吐かないよ

ⁱⁱⁱ *carenar* は *reparar el casco de una nave*（船体を修理する）という意味であり、強く叩いてなされることを意味として含んでいる。この動詞は、邦訳とは異なり、船に関する意味以外では用いられない動詞で、同業者以外には余り通じない語である。

自然における生命・生活

(Tiento)

Me gusta viví en er monte
donde la voz corre y vuela
y donde duermo tranquilo
a la luz de las estrellas^{iv}
(viví = vivir, er = el)

山で暮らすのが好きだ
声が走ったり飛んだり
星明りの下で
静かに眠れる

独立・自立

(Fandango de Pérez Guzmán)

Mi manto de cabecera
y las estrellas por techo,
el ganado en la ladera,
la tierra bajo mi pecho
y mi serrana a mi vera^v

枕下にはマント
天上には星
山の中腹には家畜
胸元には大地
側にはいい女

^{iv} 言語学的には、声 (voz) という語に走る (correr) とか飛ぶ (volar) といった力強さを与える擬人的表現に着目できる。スペイン語では *se ha corrido la voz de que...* (...という噂が流れている) という表現がよく用いられるように。

^v *tener de cabecera* という表現はお気に入りのものを指すのによく用いられるが (例えば、*libro de cabecera* 「ベッドサイドにおいておきたい本」)、この詩では「枕」の同義語として用いられている。

逞しさ

(Fandango de Pérez Guzmán)

Cuando llueve en la campiña,
yo me seco con el viento;
cuántas mojaditas lleva
por esos campos mi cuerpo

田園に雨が降れば
風で乾かす
その野にて俺の体は
何度も濡れたことか

大地の子

(Martinete)

De la tierra me quejo
con gran amargura,
porque consiente que, después de criarme,
me dé sepultura

大いなる苦しみを抱き
大地に嘆く
お前は俺を生み育てたうえに
埋葬までしてくれるから

物質主義

(Siguriya)

El que pierde es el que junta
su carita con la tierra;
el que se quea en este mundo

tarde o temprano se alegra
(quea = queda)

敗者は
顔を地面に埋める
この世にいるものには
いつかは喜びが訪れる

(Cabal de María Borrico)
Anda y déjame llorar
que se me ha muerto mi madre
por toda la eternidad

ああ、泣かせておくれ
私の母が死んでしまった
未来永劫に

死

(Tango, bulería o alegría)
¿Qué quieres que tenga?
las entrañas de mi cuerpo
se las va a comer la tierra^{vi}

どうしたいのだ
私の体の奥底を
大地が食べ尽くそうとしている

(Tango, bulería o alegría)
¿Qué quieres que tenga?

^{vi} ¿Qué quieres que tenga? (「どうしたいのだ」) という表現は、それに先立ってその詩の作者に向けてなされた質問「どうしたんだ (¿Qué tienes? とか ¿Qué te pasa?)」の答えとして出てきたものである。

Que me han dicho que a tu cuerpo
se lo va a llevar la tierra

どうしたいのだ
お前の体を
大地が連れ去って行ってしまうだなんて

(不明)
Qué lastima de carita
que se la coma la tierra

大地が食べてしまう
その死の表情の哀れさ

沈黙

(Soleá)
Tengo una pena muy grande;
a la tierra me la llevo
y no se la digo a nadie

私は大きな罪を背負っている
大地までそれを持って行こう
だれにも言うことなく

後悔

(Soleá de Torres Pavón)

Como los judíos,
aunque las carnes me quemen,
no reniego de lo que he sido^{vii}
(sío = sido)

ユダヤ教徒たちと同じように
私の肉体が焼かれようとも
自分の過去を否定などしない

(Soleá de Alcalá)

Cuando voy a confesá
digo lo que me parese
nunca digo la verdad
(confesá = confesar)
(parese = parece)

私が告白をするときは
自分が思いついたようには話すけど
真実は言わないよ

神とセックス

(Soleá)

Que ¿cuándo querrá Dios
que nos encontremos,
prima, en la calle,
y nos demos satisfacción?

^{vii} この詩の視覚的効果は、そこで用いられている表現 *Aunque las carnes me queman* とあいまって、かなり直截的である。また、興味ある表現は *renegar* であり、それは字義通りには2度否定することであるが、実際は、望まずに、不満をぶつぶつと呟きながら何かをするときの態度に対して用いられる表現である。

お前と街で出会って
お互いを満たすようになるのは
神がいつそれを望まれるのか
ということに過ぎないんだよ

(Carcelera)

Nochesita oscura
me dio Dios való
pa llevarme a mi compañera
jasta er panteón
(nochesita = nohecita, való = valor, jasta = hasta, er = el)

暗い夜
神が僕に勇気をくれた
その墓地まで
お前を連れて行くのに

健全なセックス

(Tango)

Anda, que te pillo^{viii}.
Anda, que te alcanzo.
Que corre que te lleno
la falda de fango

さあ、お前を捕まえるぞ
さあ、追いつくぞ
走れ、走れ
スカートに泥だらけにしちゃうぞ

^{viii}「追いかける」に相当する *pillar* という語は *atrapar* の意味であるが、それはスペインのスペイン語では *coger* とも言えるわけで、中南米では *coger* が *follar* の意味になるのも頷けるわけだ。また「押し倒す」に相当する *tirar* の再帰動詞 *tirarse* は「セックスをする」の意味で用いられる。例えば、*Ayer viernes me tiré a una tía*。さらには性差の解消といった傾向のなかで *tirarse a un tío* といった表現も使われ始めている。

愛の夜

(Bulería de Lole y Manué)

Al amanecer,
al amanecer,
con un beso blanco
yo te desperté

夜明けに
朝を迎えるこのときに
喜びの後の口づけで
お前を目覚めさせた

(Bulería de Lole y Manué)

Y cuando tu boca
se separó de la mía
la noche, dos veces negra,
se vistió de luz del día

君の唇が
僕の唇から離れたとき
真っ暗な夜が
朝の光を帯びていた

激情

(Tango extremeño)

Si mi mare no me casa
para el domingo que viene
le pego fuego a la casa
con toíto lo que tiene
(mare = madre, toíto = todo)

次の日曜日までに
母が私に結婚させてくれないなら
何もかもいっしょに
この家に火を放つ

男尊女卑

(Tiento)
Por Dios que la respetara
llorando me lo pedía,
yo viendo que me quería
de su cuerpo abusaba
ella callaba y sufría

後生だから大切に
そうあいつは泣きながら俺にすがったんだよ
でも俺のことを愛しているってわかってるから
体を弄んでやったのさ
それでも黙って耐えていたんだぜ

(Tango)
Si no te vienes conmigo,
jaste cuenta que has cobrao
en la tierra un enemigo
(jaste = hazte, cuenta que = cuanta de que, cobrao = cobrado)

いっしょに来ないのなら
考えてみるんだな
ここに一人敵をつくってしまうことを

(Tango)

En la esquinita te espero;^{ix}
Chiquilla, como no vengas,
aonde tencuentre, te pego
(aonde = en donde, tencuentre = te encuentre)

その角っこでお前を待っているよ
可愛い子ちゃん、来ないなんて言ったら
どこで会ってもぶん殴ってやる

(Tango)

Mira que mira y mira,
mira que anda y anda,
que quieras tú o que no quieras,
harás lo que yo te diga^x
si quieres viví a mi vera
(viví = vivir)

見ろと言ったら見るんだよ
歩けと言ったら歩くんだよ
お前がそうしたくても、したくなくとも
俺がお前に言った通りにするんだ
もし俺のそばにいたいのならね

性の虜

(Siguriya)

Yo no sé lo que le ha dado
esta serrana^{xi} a mi cuerpo,

^{ix} *En la esquinita te espero* はスペイン語でよく使われる表現であるが、セビジャにはこのフレーズを茶化した名前のバルがある。その店の名は *En la espero te esquina*。

^x スペイン語では *si no quieres ahí tienes la puerta* (いやならそこにドアがあるよ) という表現がよく用いられるが、ジプシーの世界ではほとんど用いられない。多くのこういった詩を生んできたジプシーたちは「家」には住んでいなかったからで、出て行くドアがなければ、出ていく家もなかったのである。女は野外で、それも今日はここ、明日はあそこという風に、男のそばに連れ添って暮らすのである。

^{xi} *serrana* は *mujer que vive en la sierra* という表現が起源となっている。

que hago por desecharla
y más presente la tengo
(dao = dado)

この娘が俺の体に
何をしたというのだろう
忘れようとすればするほど
その姿が頭から消えない

(Soleá de Charamuzco)
Estás ciego pa no vé
lo que conmigo estás jasiendo,
qué te ha dao esa mujer
pa que la sigas queriendo
(pa = para, vé = ver, jasiendo = haciendo, dao = dado, pa = para)

あなたは目が見なくなったの
私としていることが分からなくなるなんて
あの女はあなたに何をしたの
その女を愛し続けるようにするために

永遠の愛

(Tango)
Porque me viene de herencia
de unos gitanos honraos
y de familia canastera,
yo siempre estaré a tu lao
y no me iré de tu vera
(honraos = honrados, lao = lado)

俺が受け継いだのは
高潔なジプシーの血と

籠作りの家系さ

だからずっとお前のそばにいて
お前を捨てることはしないさ

(Soleá de Tomás Pavón)

Diez años después de muerto,
la tierra me preguntó
que si te había olvidao,
y yo le dije que no
(olvidao = olvidado)

お前が⁸死んで10年経って
大地が⁸私に問う
忘れてしまったのかと
忘ていない、俺は答えた

娼婦

(Soleá de Tomás Pavón)

Por mi mala suerte
he venío a dá
con una hija de mala mare
jartita e roá^{xii}

(venío = venido, dá = dar, mare = madre, jartita = hartita, e = de, roá = rodar)

俺は運が⁸悪い
真っ当な暮らしに飽きた
こんな親譲りの性悪女に
中（あた）るなんて

^{xii} *hartita de rodar* という表現は「歩き回るのに飽きた」という意味だが、これが「安い娼婦になって、どこでも男と寝ることで生きていく」という意味になる。

(Soleá de Tomás Pavón)

Te den una puñalá,
tó er mundo de ti consigue,
yo no pueo conseguí ná

(puñalá = puñalada, tó er = todo el, pueo = puedo, conseguí = conseguir, ná = nada)

お前に鉄槌がくだらんことを願う
みんながお前から喜びを得ているのに
俺は何も得ることができないなんて

苦痛

(Romance o siguiiriya)

El que me quiera quitar
el querer de esta gitana
ha de matarse conmigo...^{xiii}

このジプシー女の愛を
俺から奪い取ろうなんて
俺といっしょに死ぬことになるぞ

(不明)

Mora, vente conmigo,
que llevo en la cintura
pistola y cuchillo
pa que nadie pueda quitarme tu cariño
(pa = para)

^{xiii} この詩はフラメンコのある集まり（peña）での歌手（カンタオール：cantaor）のカンテから直接収集したものであるので、歌手のアドリブの可能性もある。

マグレブの女よ^{xiv}

俺と来るんだ

俺の腰にはピストルとナイフ

だれも俺からお前の愛を奪えないように

辱しめ

(Soleá, carcelera o tiento)

Límpiate los ojos,

que llorá no vale,

que la manchita que a ti ta caío

se lava con sangre

(llorá = llorar, ta caío = te ha caído)

涙を拭いて

泣いても何もならないよ

お前に降りかかった汚れは

血で洗ってやるよ

妻と愛人

(Tiento azambrado de la Paquera)

De dos mujeres que quiero

¿de cuál me desprenderé?

Si dejo una por otra

loquito m'he de gorbé

Si dejo otra por una

mi derecho lo quebranto

Yo me metí en el queré...

¡Malhaya^{xv} quien quiere tanto!

(m'he = me he, gorbé = volver, queré = querer)

^{xiv} 原文は *mora* (ムーア人の女、*moro* の女性形)。*moro* はベルベル語で「祖国を愛する人」の意味であるが、キリスト教徒がイスラム教徒に対して呼称として用いていた。ここでは、同じジブシーの女に *mora* と呼びかけたことが興味深い。ジブシーとイスラム教徒の間で浅黒い肌の色や顔つきなどが似ているからである。「ムーアの女」とすべきかどうか悩ましいところであった。

^{xv} *malhaya* はすでに使われなくなった表現である。

俺の愛してる二人の女
どちらから逃れられるかって
一人がいなくなったら
気が狂うし
もう一人だと
契りを破ることになるし
俺は愛にのめりこんだ
こんなに愛してるなんてバカな奴だ

束の間の愛

(Alegria)

Yo te quise una semana
y a la otra no te quise
porque no me dio la gana

お前を一週間愛していたけど
次の一週間はもう愛せなかった
そうしたいと思わなかったからだ

(Soleá de Cádiz)

Si quieres que te lo diga,
cantando te lo diré:
el amor que te tenía
por donde vino se fue

俺に本当のことを言って欲しいなら
歌いながら言ってやるよ
「お前との愛は
辿ってきたところから去ってしまったのさ」

(Siguriya de Manuel Torres)

Se mudaron los tiempos

me he mudao yo;
aonde no hay escritura jesha
no hay obligasión
(mudao = mudado, aonde = adonde, jesha = hecha, obligasión obligación)

時が移ろい
俺も変った
何か書いて約束したわけではないから
そこに繋がれる義務はない

(Alegria)
El hombre:
Prometer y prometer
hasta meter
y, después de metido,
nada de lo prometido

男は
(籍に) 入れるよ、入れるよと
入れるまで言って
入れた後は
そんな約束はどこかに行ってしまうのさ

嫌悪

(Soleá de Alcalá)
No sé lo que me has daíto
pa que yo tanto te quiera,
que mas jecho aborrecé
a quien quería de veras
(daíto = dado, pa = para, mas jecho = me has hecho, aborrecé = aborrecer)

俺に何をしたかわからない
こんなにお前を愛するようになるなんて
本当に愛していた女を
こんなに嫌いにさせるなんて

(Soleá de la Niña de los Peines)

Que mis ojos te vean
aborrecía y queriendo,
y que las *ducas* te coman
las entrañas de tu cuerpo^{xvi}
(aborrecía = aborrecida)

俺の眼が見ることに
俺に嫌われながらも、俺を愛しているお前
その苦しみが食い尽くす
お前の内臓までも

裏切り

(Soleá de la Cerneta)

Anda, mar tiro te peguen
que te regüerba en tu sangre,
que mas quería vendé
como si yo fuera carne

(mar = mal, regüerba = revuelvas, mas = me has, quería = querido, vendé = vender)

もうおしまいだ
お前は不幸な銃弾をくらい
血の中でのたうちまわることに
俺を売ったからだ
まるで俺がただの肉であるかのように

^{xvi} 願望の表現の *ojalá que* の *ojalá* が省略されていることに注目したい。というのはその語源はアラビア語の *in sha'a lāh* であり、異端審問の時代キリスト教に強制的に改宗させられたモリスコたちはその表現を使うのを憚ったからである。しかし、省略されていても、アラビア語の *du'ā*（アラーへの願い）を気持ちに込めているのである。なお、*ducas* は *penas* のジブシー表現。

喧嘩

(Coletilla de soleá de Urtera)

Soy castillo de frontera:
mientras tenga un muro en pie
siempre estaré en pie de guerra

俺は国境の城である
未解決の壁があるかぎり
戦いの場を離れない

自由

(Carcelera)

Carcelero, carcelero,
ábreme esta ventanita
que quiero hablar con el cielo

看守様、看守様
お願いだから、この小窓を開けてください
空と話しがしたいんだ

(Carcelera)

Me senté bajo un olivo,
brillaban las estrellas,
iba dejando el martirio
del peso de mis cadenas

オリーブの木の下に座り
星が輝やき
鎖の重さの苦痛が
解き放されていく

その日暮らし

(Minera)

Malditos sean los dineros
que ganamos en las minas,
yo gastármelos prefiero
aunque viva en la ruina
por si de pronto me muero

鉱山で稼いだ金なんて
こんちくしょうだ
落ちぶれて暮らしても
使いたいを決まっているのに
だって突然死ぬかもしれないじゃないか

ワイン

(Final de Soleá de Cádiz)

Traigo una sacramenta
que a Dios llamo de tú...

神をお前呼ばわりするほどに
秘跡の酒に酔いしれる

(Bulería de Lole y Manue)

Y en una venta,
tomando vino y más vino
a mi hermano de camino
le escuché dos o tres letras:
mi novia se llama “Estrella”
y tiene un firmamento solito pa ella
(pa = para)

そして、とある屋台で
次々にワインを飲みながら
その場限りの兄弟から
ちょっとした言葉を聞いた
俺の恋人は「お星様」っていうんだ
だからこの大空を独り占めだぜ

馬鹿騒ぎ

(Sorongo)
Bailando entre las encinas
me gusta ver la luna,
en lo alto e la colina
me dan las doce y la una
(e = de)

こ檜（なら）の木立で踊りながら
月を見るのが好きだ
丘の小高いところで
12時、1時と過ぎていく

(Sorongo)
A las doce o a la una,
cuando viene el viento,
siempre me encuentra borracho de luna
sin conocimiento

12時になり1時になって
風が吹き始めると
いつも知らず知らずに
俺に月下酔人が訪れる

結び

(Sorongo)

La luna es un pozo chico
las flores no valen nada
lo que valen son tus brazos
cuando de noche me abrazas
(Federico García Lorca)

（あなたはもう私を愛してくれてない…）

月は小さな井戸^{xvii}

花も何の価値もなく
大切なのはあなたの腕だけ
夜、私をぐっと抱きしめてくれる
（フェデリコ・ガルシア・ロルカ）

^{xvii}「月が小さな井戸」とは、月は小さな井戸と同じで、丸くて暗いので、花が慰めにならないように、月も慰めにならないという意味で詠われている。

参考文献

- AOKI, F y HAYA, V. *Expresiones de dinamismo emocional en la poesía flamenca Expresiones de sosegado sentimiento en el haiku*, la Universidad de Fukuoka, 2005.
- AOKI, F y Haya, V. *Expresiones dinámicas del flamenco*, la Universidad de Fukuka 2006.
- AOKI, F., HAYA, V., TSUJI, H. y HERNÁNDEZ ARRIBAS, M^a. J. *Expresiones visuales del castellano (usado en Andalucía)*. Editorial Geirin. Tokyo, 2004.
- BARRIOS, M. *Gitanos, moriscos y cante flamenco*, RC. Sevilla, 1989.
- FERNÁNDEZ BAÑULS, J.A. y PÉREZ OROZCO, J. M^a. *La poesía flamenca lírica en andaluz*. Ayuntamiento de Sevilla, 1983.
- FERNÁNDEZ BAÑULS, J.A. y PEREZ OROZCO, J. M^a. *Joyero de coplas flamencas*. Biblioteca de cultura andaluza. Sevilla, 1986.
- GARCÍA CHICÓN, A. *Valores antropológicos del Cante Jondo*. Diputación Provincial de Málaga. 1987.
- JIMÉNEZ, A. *Vocabulario del dialecto gitano*. Imprenta del conciliador. Sevilla, 1853.
- LARREA, A. *El flamenco en su raíz*. Editora Nacional. Madrid, 1974.
- MACHADO Y ALVÁREZ, A. *Colección de Cantes Flamencos*. Demofilo. Madrid, 1881.
- ROPERO NÚÑEZ, M. *El léxico caló en el lenguaje del cante flamenco*. Universidad de Sevilla. 1991.
- VILLÉN, J.M. *Novísimo cancionero erótico, sentimental y flamenco*. Sevilla, 1887.